

## 四つ仮名表記の揺れ

——大学生を中心としたアンケート調査の結果から——

田 鎖 美優紀

### はじめに

日本語の歴史の中には、その変化の過程で、現在すでに消えてしまった音が存在する。このうち、ザ行のジとズ、ダ行のヂとヅという四つ仮名は、現代仮名遣いにおいて、表記面で残存しながら、現在、方言では音に区別が残っている地域もある。一方、共通語では、ジとヂ、ズとヅはそれぞれ同音になっており、変化の結果に従って、いずれかの仮名が消滅していても不自然ではない。しかし、ジ・ヂ・ズ・ヅはいずれも消えることなく、現在も使用されている。本稿では、アンケート調査の結果を利用して、四つ仮名表記の使用実態とその傾向を明らかにし、四つ仮名の表記には揺れが存在することを示す。そして、その揺れを引き起こす要因について、考えられることを述べる。

### 1. 研究の目的

四つ仮名は、現代日本語において、ジとヂ、ズとヅがそれぞれ同音となっている。歴史をさかのぼると、古くはその発音に区別があった。四つ仮名とその合流の歴史について考察した先行研究には、近年では、高山倫明（2012）、高山知明（2014）などがある。これらの研究では、文献に現れた、表記上の混同・混乱の実態が示されるとともに、それを引き起こした音の考察が進められている。前者では、四つ仮名の混同と前鼻音消失との関連性を裏付けるための根拠を探る必要性が説かれ、後者では、たとえば『蜷縮涼鼓集』の内容には、前鼻音消失が関わっていることなどが述べられている。

このような国語史資料を利用した四つ仮名研究に対して、現代日本語における四つ仮名の実態を記したものは、方言研究<sup>(注1)</sup>を除けば数が少ない。特に、仮名表記上の混同に関しては、「現代仮名遣い」との関係から考察を加えていく必要がある。

「現代仮名遣い」は、「語を現代語の音韻に従って書き表すこと」を原則としているが、歴史的仮名遣いも尊重されるべきこととして、一定の特例が設けられている。四つ仮名も「現代仮名遣い」の書き分けの対象となっており、基本的にジとズを使用するよう原則として定められている。しかし、「(1) 同音の連呼によって生じた「ぢ」「づ」と「(2) 二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」については、表記の慣習を尊重してヂ・ヅを使用することが認められていて、語例も多く示されている。さらに、「なお、次のような語については、現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの等として、それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則とし、「せかいじゅう」「いなづま」のように「ぢ」「づ」を用いて書くこともできるものとする」というなお書きもあり、ジとヂ、ズとヅのどちらで書くことも認められている語もある。

このように、「現代仮名遣い」には、表音的に表記を行う原則を持ちながらも、歴史的仮名遣いを踏襲した部分が入り込むという二面性が存在している。このことは、仮名遣いの規範に備わる二面性が、四つ仮名の長い歴史の中で、表記の上での新たな「混乱」を招いているのではないだろうか。

そこで、筆者は、あらかじめ「現代では、ジズの使用例の方が多くなっており、ヂヅは減少傾向にあることが分かるのではないか」という仮説を立ててみた。そして、表記の実態を把握するために、アンケート調査を行い、その結果から四つ仮名表記の現状を明らかにすることを目的とした。

## 2. 調査の概要

### 2. 1. 調査項目

調査項目は、主に「現代仮名遣い」で提示されている、「じ・ぢ」「ず・づ」の書き分けの語例を参考とし、アンケート形式とした。

アンケートでの調査項目は、大きく五つの質問内容に分かれている。まず1項目でアンケート回答者の年齢、性別、出身都道府県について尋ねた。2項目では、なぞなぞ形式の問いによって、「片付ける」「お小遣い」「頷く」「相槌」「こちんまり」「躓く」「間近」をそれぞれ平仮名で記述してもらうことにした。3項目は、「正しいと思う表記」を選択するもので、「世界中」「生地」「縮む」「鼻血」「杯」「跪く」「三日月」「小包み」「お小遣い」「稲妻」

「地面」「やり辛い」のそれぞれについて、提示した複数の仮名表記から選択してもらった。選択肢には、「どちらも正しい」「分からない」も設けた。4項目は四つ仮名に対する意識について問うもので、「[じ]と「ぢ」、[ず]と「づ」はそれぞれ同音だが、同じ音声のものは日本語として必要だと思うか」「パソコンを使うという方で、「ぢ」と「づ」を打つ時に、誤ってそれぞれ「zi」と「zu」と打つことがあるか」「[di]と「du」を見た時、それぞれ何と発音すると思うか」という3つの問いを用意した。また、5項目には、自由記述欄を設け、四つ仮名に対する意見や、アンケートを受けて感じたこと等を自由に記入してもらった。

## 2. 2. 調査方法

本調査は、幅広い年齢層の216名を対象にアンケートに回答してもらい、その回答によって、現代の四つ仮名表記にどのような傾向があるかを把握するという方法で行った。

アンケート回答者は、大学生が大半となり、10代が38%、20代が36%で、30代、40代、50代、60以上の、それぞれの年代は10%に満たない。回答者の出身都道府県は、宮城県が中心で68%を占める。このようなばらつきを鑑み、年齢差や地域差については考察の対象としない。

## 3. 四つ仮名表記の現状

ここからはアンケート調査から明らかになったことを述べていく。

### 3. 1. 四つ仮名表記の揺れの実態

アンケート調査の結果、「片付ける」「お小遣い」「領く」「間近」は、「現代仮名遣い」で原則として使用するよう定められている「かたづける」「おこづかい」「うなずく」「まちか」の表記で回答した割合が多かった。「相槌」に関しては、「現代仮名遣い」に語例として挙げられていないが、「あいづち」での回答が多く、たとえば『例解新国語辞典』では「相づち」で記載されているように、辞書通りの表記で使用している人が多いことが分かった。「世界中」「生地」「縮む」「鼻血」「三日月」「小包み」「お小遣い」「地面」の回答結果は、それぞれ「せかいじゅう」「きじ」「ちぢむ」「はなぢ」「みかづき」「こづつみ」「おこづかい」「じめん」という、「現代仮名遣い」の原則の

表記で回答した割合が多かった。「やり辛い」も「相槌」と同様に、「現代仮名遣い」に記載されていない語であるが、同辞書では、「動詞の連用形について、そうするのがやりにくい、という意味を表わす」接尾語として「づらい」という表記であった。

これらの語の回答結果はいずれも「現代仮名遣い」通り、あるいは辞書通りの表記で回答した結果が7割を超えているものの、多少の表記揺れが存在するということが分かった。

一方、表記揺れが顕著に表れたのは、「こじんまり」「躓く」「杯」「跪く」「稲妻」の5語である。これらの語は全て「現代仮名遣い」の原則通りの表記での回答が7割を下回っている。このような表記揺れが大きかった語は、その揺れにどのような傾向があるのか。以下で、詳しい実態について見ていく。

### 3. 1. 1. 「こぢんまり」の表記

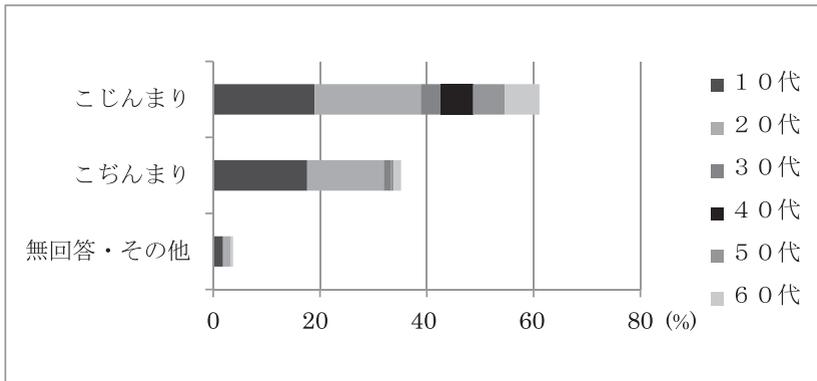


図1 「こぢんまり」の表記

図1は、「こぢんまり」の回答結果を集計したものである。「こじんまり」と回答したのが61.1%、「こぢんまり」と回答したのが35.2%、無回答・その他の回答が3.7%であった。「現代仮名遣い」では、「こぢんまり」は「(2)二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」の項の語例として提示されているため、本来、「こぢんまり」という表記が標準的であると定められている。しかし、「こじんまり」という表記での回答の方が「こぢんまり」よりも上回っているという結果が得られた。

### 3. 1. 2. 「躡く」の表記

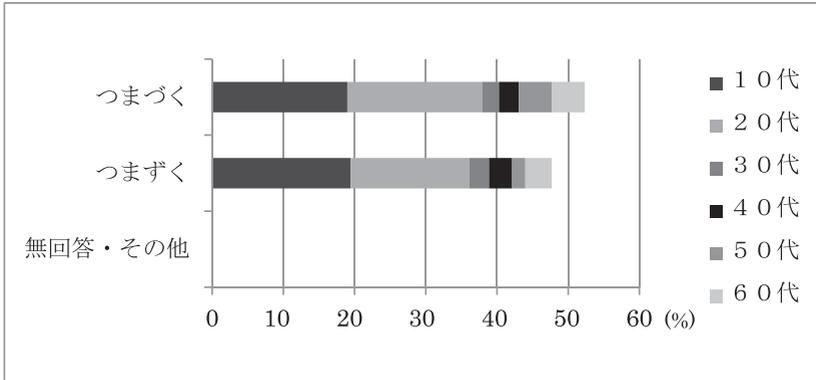


図2 「躡く」の表記

次に「躡く」を見てみたい。「つまづく」が52.3%、「つまずく」が47.7%と、ほぼ半々の割合となっており、表記揺れが非常に大きいことが分かる。「躡く」は、「現代仮名遣い」では、「つまずく」と書くように定められている。しかし、調査結果では、「つまづく」の回答率の方が「つまずく」よりもわずかに多いということがわかる。

### 3. 1. 3. 「杯」の表記

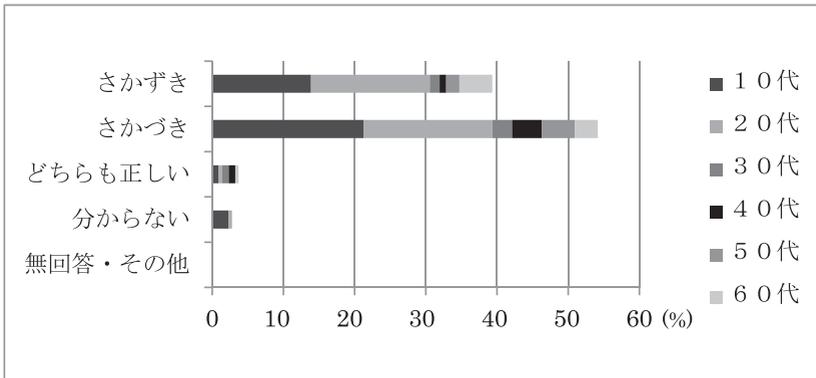


図3 「杯」の表記

「杯」の回答結果は、「さかずき」が39.4%、「さかづき」が54.2%、「どちらも正しい」が3.7%、「分からない」が2.8%であった。「杯」は「現代仮名

遣い」では、「現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの」と見なされており、「じ」「ず」を用いて書くことを本則」としているものの、旧仮名遣いの「さかづき」と書くことも許容されている。「さかづき」の選択率がこれほどに下回ったのは意外であった。

### 3. 1. 4. 「跪く」の表記

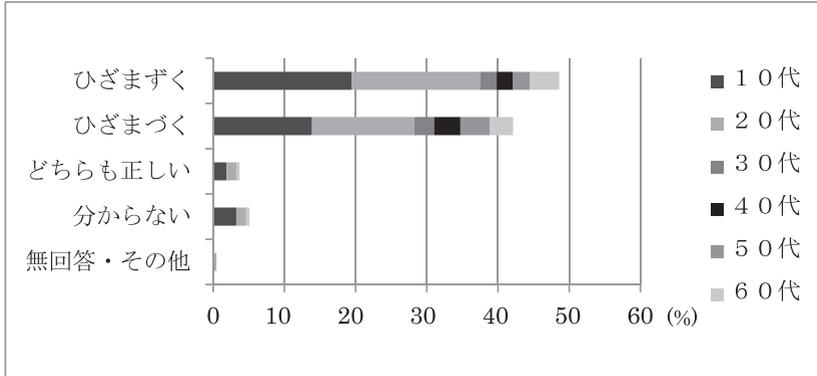


図4「跪く」の表記

「跪く」の回答結果は、図4の通りである。「ひざまずく」の回答が48.6%、「ひざまづく」の回答が42.1%、「どちらも正しい」の回答が3.7%、「分からない」の回答が5.1%、無回答・その他の回答が0.5%であった。「跪く」は、「現代仮名遣い」で原則として「ひざまずく」と書くよう定められている。しかし、「ひざまづく」を選択した割合も半分近くを占めている。

「躓く」と似たような結果が出たが、「跪く」の方がヅを用いた表記の割合が少ないという結果が出たのは、「跪く」という言葉の方があまり馴染みがないせいもあるのだと考えられる。

### 3. 1. 5. 「稲妻」の表記

「稲妻」の回答結果は、「いなずま」が28.7%、「いなづま」が55.1%、「どちらも正しい」が12.5%、「分からない」が1.9%、無回答・その他が1.9%であった。最も選択率が高かったのが「いなづま」であったが、「現代仮名遣い」の原則では、「いなずま」の表記で書くように定められている。「稲妻」は、「現代仮名遣い」のお書きに「次のような語については、現代語の意

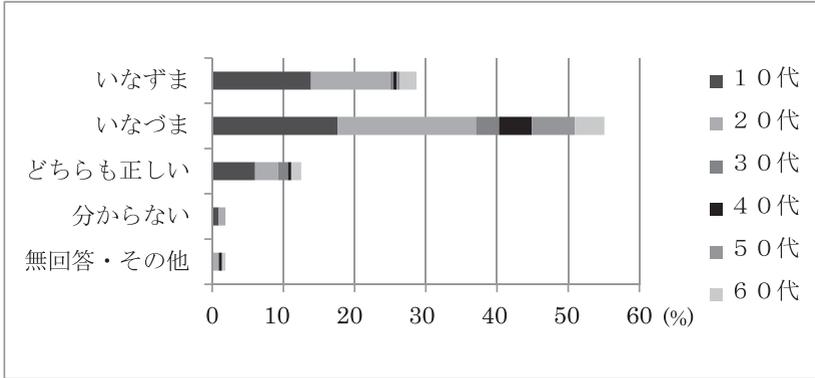


図5 「稲妻」の表記

識では一般に二語に分解しにくいもの等として、それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則とし、「せかいぢゅう」「いなづま」のように「ぢ」「づ」を用いて書くこともできるものとする」と記載されているため、「いなづま」という表記が認められていないわけではない。しかし、原則としては「いなづま」と書くように定められているため、その原則がかえって大きな揺れを引き起こしている可能性がある。また、「どちらも正しい」とした選択率は選択式の問いの中で最も高かった。アンケートの自由記述欄にも、「稲妻は「いなづま」だと思っていたが、「いなづま」でも良いのかと分からなくなった。妻は「つま」だから普通に「つ」に点をつければいいのかと思った」（宮城県10代女性）、「基本的に清音の読み方に濁点をつければよいと考えていたが、「稲妻」のみ「妻」なのに「ずま」を使用することが（個人的に）多いので、不思議に思った」（宮城県10代女性）、「漢字で書いた時にその漢字の単体の時と熟語の時とで書き方（送り仮名）が違う時があるのは何故か。例、稲妻（福島県10代女性）というように、「稲妻」の平仮名表記に関する疑問が寄せられた。「妻」は「つま」と読むために、「稲」の複合によって「ずま」に変わることが気になる人が多くいるようである。

### 3. 1. 6. 回答の書き直し・選択し直しからみた揺れ

これまで示したように、アンケート調査では、表記に揺れがある語を示すことができた。しかし、この調査では、回答結果以外からも表記の揺れを見つけることができた。それは、回答用紙に痕跡として残っていた、書き直し

と選択し直しの形跡で、合わせて57件にのぼった。アンケート回答者は216人であるため、およそ4人に1人は書き直し・選択し直しを行っていることになる。その中でも、書き直し・選択し直しが最も多かったのが、「間近」であった。「間近」の書き直しは11件である。その他、平仮名記述項目での「お小遣い」が9件、「こぢんまり」、「生地」が5件、「領く」、「世界中」が4件、「片付ける」、「相槌」、「稲妻」、「地面」が3件、「躓く」が2件、「鼻血」、「杯」、「小包み」、選択式項目での「お小遣い」、「やり辛い」が各1件の書き直しや選択し直しがあった。書き直しや選択し直しをすることというのは、自らが書いたこと、選択したことを不自然に感じたために修正を施していると見られ、直接の回答結果以外の部分から、表記揺れの実態を示すことにもなった。

また、アンケートの自由記述欄にも、「普段あまり気にしたことがないので、正しいか正しくないかが分からなかった」（宮城県30代男性）、「普段はあまり気にしていないが、改めてどちらかと聞かれると、「あれ？どっちだったけ？」となることが多い気がした」（宮城県10代女性）、「使い分けが良くわからない」（福島県60代）等、多くの声が多く寄せられた。どの年代からも、「使い分けが分からない」「回答の際に迷った」というコメントがあった。

揺れの原因については後述するが、規範となる「現代仮名遣い」において、表音による仮名遣いと歴史的仮名遣いが共存していることが一つの原因となっており、上記のような個々人の表記レベルでの揺れが生じているように思われる。

### 3. 2. 意識調査から見えた四つ仮名の現状

アンケートでは、四つ仮名に対する意識調査を3項目用意した。

#### 3. 2. 1. 四つ仮名の必要性に対する意識調査

意識調査の一つ目は、「「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」はそれぞれ同音だが、同じ音のものは日本語として2つも必要だと思うか」という、四つ仮名の必要性を尋ねたものである。その結果は、「必要だと思う」が63.9%、「必要ないと思う」が7.9%、「分からない」が9.7%、「どちらとも言えない」が17.1%、無回答・その他が1.4%であり、必要と考える回答が半数以上占めていることから、四つ仮名表記の区別に有用性を認める意見が多いようである。

つまり、「じ」「ぢ」および「ず」「づ」のそれぞれの表記併存の有用性自体には肯定的意見が多い。そこで、四つ仮名表記併存の有用性に対する意識が四つ仮名の書き分けに影響を与えているのではないかと考え、アンケートの18項目全てについて、仮名遣い使用のデータと使用意識のクロス集計を行った。

この結果、併存肯定者が実際の仮名遣いにおいて語源重視の表記型を積極的に選択する、あるいは併存否定者が語源意識にとらわれない表音型のみを選択する、といった結果は見られなかった。ただし、特に揺れの大きかった「こぢんまり」「躡く」「杯」「跪く」「稲妻」の5例のなかで、併存否定者は肯定者に比べて、「躡く」「こぢんまり」「杯」「稲妻」において仮名遣いの標準的な表記を選択した割合が低い。「どちらとも言えない」層は、「こじんまり」「ひざまずく」の表音型を選択している割合がやや低い。しかし、全体としては、表記併存の必要意識の有無は、ほとんどの人では実際の表記行動に影響を与えていないとみられる。

以上のことが顕著にうかがわれるのが、次に示す「躡く」の結果である。

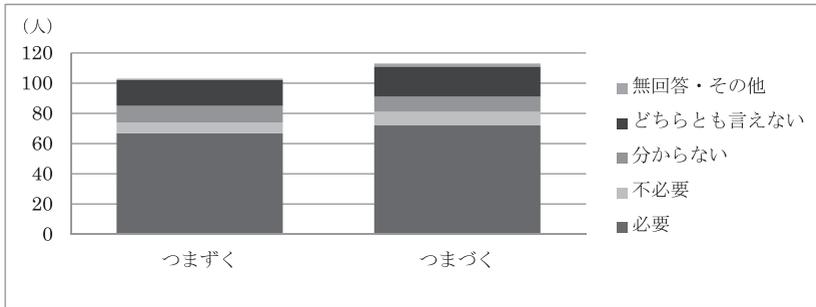


図6 「躡く」の表記と仮名必要性意識のクロス集計

図6を見てみると分かるが、「躡く」は、「つまずく」と「つまずく」とで、「必要」、「不必要」、「分からない」、「どちらとも言えない」、「無回答・その他」の割合がほぼ同じである。四つ仮名の併存肯定者と否定者がそれぞれ、どちらの回答にも偏りを見せていないことから、四つ仮名表記併存の有用性に対する意識は四つ仮名の書き分けを考える際に、あまり関与していないということが分かる。

さらに、図7の「杯」の結果も見よう。

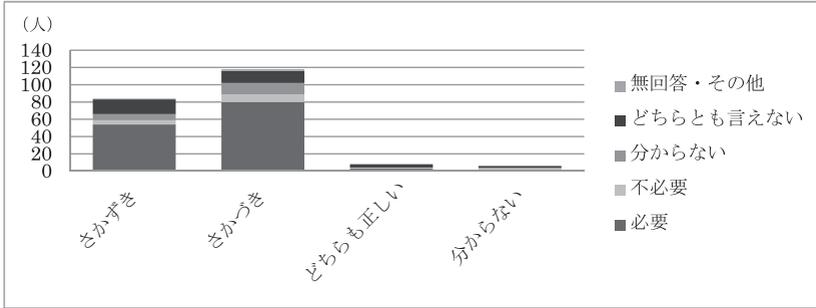


図7 「杯」の表記と仮名必要性意識のクロス集計

「杯」の結果は、わずかに「どちらも正しい」、「分からない」を回答した人がいるものの、「さかずき」と「さかづき」にほぼ同じ割合で意識回答のバリエーションが入っている。

そのため、表記併存の必要意識の有無は、直接的に四つ仮名表記の揺れを引き起こしている要因だとは考えにくく、四つ仮名の使い分けにはあまり影響していないということが考えられる。

### 3. 2. 2. パソコンでの文字入力及びローマ字表記に対する意識調査

意識調査の二つ目は、「パソコン使用者が「ぢ」と「づ」を打つ時に、誤ってそれぞれ「zi」と「zu」と打つことがあるか」を尋ねた。パソコンでヂ・ヅをタイピングする時に誤入力があるかどうかによって、ジ・ズがヂ・ヅよりも優先的に表記されているかを把握するものである。その結果は、「よくある」が16.2%、「時々ある」が28.7%、「どちらでもない」が2.3%、「あまりない」が27.3%、「全くない」が13.0%、「分からない」が3.2%、「パソコンは使わない」が7.4%、無回答・その他が1.9%であった。「時々ある」と「あまりない」の割合が非常に近い数値になっている。しかし「よくある」と「時々ある」の割合の合計は44.9%、「あまりない」と「全くない」の割合の合計は40.3%であるため、「誤入力がある」の割合の方が多い。この結果から、ヂ・ヅを入力する際に、「zi」「zu」を誤って入力する人が多いため、入力行動に関しては、ジ・ズがヂ・ヅに対して優勢であることが分かる。しかし、誤入力の有無の回答は、双方同程度となっており、揺れの存在の大きさを裏付ける結果となった。

三つ目は、「[di]と[du]を見た時、それぞれ何と発音すると思うか」と

いう問いによって、ジ・ズがなぜ先行するのかを調査したものである。その結果は、「[ぢ]と[づ]」が25.5%、「[でい]と[どう]」が50.9%、「[ぢ]と[づ]」、「[でい]と[どう]」どちらでも良い」が14.8%、「分からない」が5.1%、「その他」が1.9%、無回答が1.9%であった。「[でい]と[どう]」の回答が圧倒的に多く、半数以上を占めていた。これは、ヂとヅの日本式ローマ字表記が「di」と「du」であるという認識が希薄化していることがうかがわれ、「di」と「du」が「ディ」と「ドウ」という外来語音を連想させるために、表記の揺れを引き起こす原因の一つとなっていると考えられる。

#### 4. 表記の揺れを発生させる要因

ここからは、アンケートの調査を受け、現代の四つ仮名表記の揺れを引き起こしていると考えられる要因を考察していく。

##### 4. 1. 語源と語構成の意識

アンケート調査では、四つ仮名の使い分けに語構成意識の存在<sup>(注2)</sup>がうかがわれる結果が見られた。

「片付ける」「お小遣い」「相槌」「間近」「鼻血」「三日月」「小包み」「やり辛い」の回答はそれぞれ「かたづける」「おこづかい」「あいづち」「まちか」「はなぢ」「みかづき」「こづつみ」「やりづらい」という、タ行のヂ・ヅを用いた表記の回答率が高かった。このような結果になったのは、これらの語が「相槌」を除けば、漢字表記として比較的分かりやすく、語源も意識しやすい語構成になっていることにあるだろう。これは、各熟語が二語から構成されていて、下位要素の語頭が連濁を起こしているという認識を持っている人が多いものと思われる。「片付ける」「お小遣い」「間近」「相槌」「鼻血」「三日月」「小包み」は、二語が連合した語で、下位要素の語頭がタ行のチカツになっている。そのために、下位要素のチとツが連濁を起こしているものと考えた結果、チとツに対応する濁音である、ヂとヅを用いた表記の回答が多くなり、表記揺れが少なかったのだと考えられる。さらに、漢字及び語に対する馴染み度も表記揺れに関係しているだろう。表記揺れが少なかった語は、ほぼ常用漢字で構成されている。その上、語自体が日常的によく使われるために、馴染み深さが表記揺れを少なくしたものと考えられる。また、「現代仮名遣い」で定められている表記と一致していることもあって、表記の揺れ

が少なかったと推察される。

一方、「稲妻」については、「現代仮名遣い」では、原則として「いなづま」と書くように定められている。しかし、アンケートの結果では「いなづま」の回答の方が多かった。現代において、「稲妻」の語源は意識されにくくはなっているが、「妻」一語では、「つま」と読み、「稲（いね）+妻（つま）」という語構成になっている。そのために、漢字の読み引に引張られ、「いなづま」の表記の方がかえって自然に感じたものと考えられる。これに対して、「現代仮名遣い」では表音的な表記である「いなづま」の方を原則として使用するよう定めているために、回答が「いなづま」と「いなづま」とで揺れたと考えられる。

語源に沿う仮名表記は、「躓く」と「跪く」でも見られた。両語の回答結果は、すでに示したように、「つまづく」「つまづく」（図2）および「ひざまづく」「ひざまづく」（図4）のそれぞれの表記について、ほぼ半々の割合である。これはおそらく語構成を推測したことによるのではないだろうか。まず、「躓く」は、『日本国語大辞典第二版』によると、「足先が物につきあたる。歩いたり走ったりして、つま先を路上の石などにつきあて体勢をくずす。けつまづく」とある。語源説は、同辞典によると「ツマツク（爪突・爪衝）の義」とある。「現代仮名遣い」では、「つまづく」が標準的な表記であると定められているが、一方で、語源通りの「つく（突く、衝く）」を意識し、「つま+づく」の語構成をイメージした人が多かったのではないだろうか。

また、同辞典によれば、「跪く」は、「両手を前につき、両膝を床などにつけて、臀（しり）をあげてかがまる。膝を地につけてかしこまる。主に屈服または拝礼の意を表す」とあり、「躓く」と同様に、膝と床や地面との接触が動作に含まれている。「跪く」の語源説には、同辞典で「ヒザマゲツク（膝曲衝）の義」「ヒザマヘツク（膝前衝）の義」「ヒザミナツク（膝皆突）の義」「ヒザマツツク（膝先衝）の義」「ヒザマツク（膝正着）の義」が見える。「躓く」と同様に語源に沿う接触を表す「付く」等を連想し、「ひざま+づく」という語構成を思い浮かべた人もいたのではないかと思われる。

このように、語源に沿う語構成意識と表音的に表記する場合の二様の存在が表記の揺れを引き起こしたのかもしれない。

語源と語構成に対する意識は、四つ仮名を使い分ける際の選択基準の一つ

になっていることがわかるが、それは、必ずしも「現代仮名遣い」で定められた原則通りの表記につながるわけではないことがわかる。

#### 4. 2. 類推

ある語が他の語の語形に引っ張られて変化を起こす類推の傾向が見られたのが、「躓く」「杯」「跪く」の3語である。これらの語は「現代仮名遣い」では、それぞれ「つまづく」「さかづき」「ひざまづく」のように、旧仮名遣いを離れたズを用いた表記を用いるよう定められている。しかし、アンケートの結果では、旧仮名遣いである「つまづく」「さかづき」「ひざまづく」の表記での回答も多く、特に「つまづく」と「さかづき」は、ズを用いた表記の回答を上回っていた。このような揺れが起こったのは、前項で示した「つまづく」における語源の残存のほか、他の語による影響があるのではないかと考えられる。

例えば、「躓く」と「跪く」における「つく」では、「気付く」「根付く」等の「一づく」の類推も考えられる。

「杯」の場合、表記の揺れが起こったのは、「杯」という事物自体が身近にないことも起因しているのかもしれない。「杯」の語源説は、『日本国語大辞典第二版』によれば、「サカツキ（酒坏）の義」「酒津器で、ツは休字」とあり、「さか+づき」という語構成になっている。しかし、容器の名称としての「つき（坏）」は、必ずしも日常でなじみがある語とは考えにくく、語源や語構成を考えた人もほとんどいなかったと思われる。「さかづき」よりも「さかづき」の表記に選択率が多いのは、「気付（きづ）き」や「三日月（みかづき）」等、より身近な言葉の語形からの影響を受けたために、「さかづき」の表記の回答が多くなったという可能性がある。

このように、表記揺れが生じた原因には、語ごとに個々人の類推がはたっていたということも考えられる。

#### 4. 3. ジ・ズ先行の可能性

調査の結果を見ると、四つ仮名の揺れが存在しているため、「現代仮名遣い」で原則として「じ」「ず」を用いて書くように定められている語も「ぢ」「づ」で書かれているという例があることが分かった。しかし、ヂ・ヅが使用されているものの、個人が四つ仮名の使い分けを判断する段階において、

ジ・ズの方を先行させるという傾向も結果からうかがわれる例があった。

その例として「こぢんまり」をあげる。「こぢんまり」は、「現代仮名遣い」では、「(2) 二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」の項の語例として提示されているため、本来、「こぢんまり」を原則として使用するよう定められている。しかし、調査結果では、「こじんまり」での回答の方が上回っていた。

「こぢんまり」の語源説は、『日本国語大辞典第二版』によれば、「コシマリ（小締）の音便。コは、やや意を強めていう接頭語」とある。「コシマリ」に由来するとすれば、「こじんまり」の表記は語源に沿う形となるが、これが人びとの語源意識にのぼっているとは考えにくい。

一方、意味の類似から、「こぢんまり」の語構成を「こ+ちんまり」ととらえる場合も考えられる。しかし、「ちんまり」は、使用頻度がそれほど多くはない語と思われる。そのため、「こぢんまり」の語構成が推測しにくく、表記選択の際に表音的なジの方がヂよりも先行していることが考えられる。

同じヂを含む語に「間近」「鼻血」等があるが、これらの回答は、漢字表記を参考にしたということもあったためか、「まちか」「はなぢ」の回答の方が多かった。つまり、四つ仮名表記の使い分けの判断材料が乏しい場合、表記行動ではヂ・ヅよりもジ・ズを先行するということがあるのではないだろうか。

アンケート結果からは、「鼻血」は先に「はなぢ」というイメージが出てしまう。その後、鼻血は「血（ち）」と気づき、訂正できる」との回答や、「「じ」と「ぢ」では、「ぢ」が劣勢なイメージありすぎて何でも「じ」に変換されてしまう」（宮城県20代男性）という意見もあった。四つ仮名表記の場面においては、表音的表記が先に浮かび、ジとズは、ヂとヅよりも優勢となる可能性があるのではないかと思われる。

#### 4. 4. パソコン入力によって生じた四つ仮名の揺れ

四つ仮名表記の意識調査では、「パソコンで「ぢ」「づ」を入力する際、誤って「zi」「zu」を打つことがあるか」という質問をしている。この結果、「誤入力する」と回答した数と「誤入力しない」と回答した数がほぼ同じであったが、「誤入力する」の回答の方がわずかに多かった。すでに四つ仮名に関する意識調査項目の一つである「「di」と「du」を見た時、それぞれ何

と発音すると思うか」の回答結果をまとめた箇所でも述べたが、誤入力が多い理由は、「di」と「du」に対する発音のイメージが、「ぢ」と「づ」ではないことにあるのだろう。

「di」と「du」のローマ字表記は、「ぢ」と「づ」に対して表音的なものではなく、同じ行は同じ子音でそろえることを重視した「日本式」の綴り方である。「ぢ」と「づ」を表音的な綴り方にすると、「zi」と「zu」あるいは「ji」と「zu」となる。実社会では表音的な綴り方を重視している「ヘボン式」が比較的普及していることを考え合わせれば、「di」と「du」の綴りから「ぢ」と「づ」を連想する回答者数が限られたと考えられる。それにより、キーボードでのローマ字入力によってヂとヅが誤ってジとズで書かれることが発生し、四つ仮名の揺れを引き起こすことにもつながるのではないかと推測される。

また、パソコンなどのソフトには、ジとヂ、ズとヅのどちらを入力しても正しい変換を実行する機能もある。実際に「つまずく」と「つまづく」の2パターンで入力したが、どちらの表記で入力しても「躓く」という変換結果であった。アンケートの自由記入欄にも、「携帯の変換だと、「せかいじゅう」と打って「世界中」が予測変換で出てきたりする」（宮城県10代女性）、「じとぢ」「ずとづ」を誤って使用する人も多いが、パソコンやスマートフォンなど予測変換機能に頼る人も多勢いると思う。それに頼りすぎると、自分で考えたり覚えたりする力は衰えていくように感じられる」（北海道20代女性）という意見もあった。パソコン等の機器が、ジとヂ、ズとヅのどちらの仮名を入力しても、正しい変換結果を表示するのは非常に便利な機能ではある。一方で、その機能が四つ仮名表記の揺れを新たに発生させる要因の一つになってきているとも考えられる。

### おわりに

論文作業の当初段階では、「ダ行のヂ・ヅは将来的に消滅する」という仮説を立てた上で、今回のアンケート調査によって、「ヂ・ヅが減少傾向にある」ということを明らかに出来るのではないかと考えていた。しかし、調査の結果を見てみると、ヂ・ヅよりもジ・ズの方が先行しているということは明らかになったものの、ヂ・ヅには減少傾向にないどころかむしろ使用頻度が増えている面があり、表記の揺れの存在を明らかにすることができた。そ

して、揺れを引き起こしている要因として、語構成意識、語源、類推、ジ・ズの先行などを考えてみた。また、パソコン入力という現代特有の要因も絡んでいると見られることを示した。このほか、アンケートの回答結果と四つ仮名表記併存の有用性に対する意識調査とのクロス集計を行ったことで、表記併存の必要意識の有無が、四つ仮名の使い分けにあまり影響を与えていないということも明らかにした。

しかし、本稿の課題はまだ残っている。今回の調査は、対象者が宮城県出身の若年層が中心となったため、地域差や年代差には言及できなかった。幅広い世代からのデータや他の地域出身者のデータがあれば、より多様な結果が得られたかもしれない。また、四つ仮名の文字入力の現状を把握する調査項目では、パソコンでの文字入力に限定してしまったため、「パソコンは使わない」を選択した人の文字入力の現状を把握することができなかった。スマートフォンや携帯電話で、四つ仮名の入力の際に誤入力があるかどうかの問いを設ければ、四つ仮名の現状の輪郭をより明確にできたかと思う。このほか、義務教育での四つ仮名表記についての学習経験も興味深い課題である。

#### 注

1. 九州地方や高知県の方言音声には、四つ仮名の発音の区別が残存している。岸江・吉廣・山口（2005）や杉村（2001）等からは、四つ仮名の発音の様相が示されている。
2. 「語構成意識」について、小松（1981）に「猫dzita」「丹頂zuru」の低位要素が、「ちた」や「する」に還元されることは起こりえない。そこに語構成意識が確実に存在するからである」という記述がある。

#### 参考文献

- ・大野晋（1977）「7仮名づかいの歴史」大野晋・柴田武 編『岩波講座 日本語8 文字』岩波書店
- ・奥村三雄（1977）「6音韻の変遷（2）」大野晋・柴田武 編『岩波講座 日本語5 音韻』岩波書店
- ・風間力三（1999）『要説国語学』翰林書房
- ・鎌倉暄子（1996）「四つ仮名」について—国語史的観点から— 福岡女子

大学文学部紀要『文芸と思想』1-12頁 第60号

- ・鎌田正・米山寅太郎（2007）『新漢語林』大修館書店
- ・岸江信介・吉廣綾子・山口陽子（2005）「高知方言における四つ仮名体系の動態」徳島大学総合科学部 編『言語文化研究』12巻 137-172頁
- ・小松英雄（1981）『日本語の世界7 日本語の音韻』中央公論社
- ・杉村孝夫（2001）「九州方言の四つ仮名」『音声研究』 第5巻第3号 10-18頁
- ・高山知明（2014）『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』笠間書院
- ・高山倫明（2003）「日本語音韻史研究とその課題」『音声研究』第7巻第1号 35-46頁
- ・高山倫明（2012）『日本語音韻史の研究』ひつじ書房
- ・築島裕（1981）『日本語の世界5 仮名』中央公論社
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部 編（2001）『日本国語大辞典 第二版』小学館
- ・林四郎・相澤正夫・大島資生・篠崎晃一 編著（2006）『例解新国語辞典』三省堂
- ・文化庁 編（2006）『国語施策百年史』ぎょうせい
- ・松崎寛・河野俊之（2015）『日本語教育能力検定試験に合格するための音声23』アルク
- ・松村明 編（2006）『大辞林 第三版』三省堂
- ・馬淵和夫（1994）『国語音韻論』笠間書院
- ・山口仲美（2014）『日本語の歴史』岩波新書

#### 参考URL

- ・「現代仮名遣い」文部科学省

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/k19860701001/k19860701001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19860701001/k19860701001.html)

（取得日：2017年3月21日）

（付記）調査では、多くの方にご協力をいただきました。あらためまして御礼を申し上げます。